# わが愛する歌　―名歌鑑賞―

二反田　實

悦楽の流れわたしをにんげんになししばかりか愛欲を強(し)う
背きゆく君をかなしみて仰むけば不意の殺意に似て陽がそそぐ
銀河よりなだたる風か窓に鳴るねむる赤裸によりそふ深夜

春日井　建『未青年』より

昭和四〇年の何月何日かは確定出来ないのですが、今私の手元にその時に切取った、春日井建氏の新聞記事があります。私は三年遅く大学へ入り二年生になったばかりの頃だったと思います。

「(畧)、小市民的秩序を憎悪する。なまあたたかい日常性を拒否する(畧)美意識のない詩(それを詩とよべるだろうか!)があふれている。(畧)自己満足以外のなにものでもないうすっぺらなヒューマニズムがのさばっている。(畧)これらごまかしの現象をうけいれたくはない。むしろ時代や世代の不良孤児となってもいい。」(朝日新聞「われらの時代」文学　春日井建)

あゝこの「時代の孤児となってもいい」という一言が、それから五〇年近い年月の私を貫いて生きさせた「本質」だったのだと、今しみじみと感じます。人それぞれの「生」はあるのですが、時代に遅れて生きて来た私には、充分に若い頃も生きて来た実感があり、再び若返りたいとは思わないのです。

# 巻頭言

十月一日は日本酒の日である。この日になると必ず思い出す歌がある。若山牧水の「白玉の歯にしみとほる秋の夜の酒は静かに飲むべかりけり」である。牧水は一日一升飲んだという。唐の李白も大の酒好きで「酒一斗詩百篇」と言われ、「山中にて幽人と対す」と題する「両人対酌山花開　一杯一杯復一杯　我醉欲眠旦去　明朝有意抱琴来」など酒豪家李白の面目躍如。また「花間一壺酒　独酌無相親　挙杯迎名月　対影成三人」（月下独酌）など牧水の世界に酷似する。我歌えば月徘徊し、我舞えば影零乱す。

古来酒を詠んだ歌人は多い。然し昭和三年九月十七日、四十三歳で亡くなるまで約三百首の酒の短歌を作った牧水の右に出る者は多くはいまい。

酒のためわれ若うして死にもせば　友よいかにかあはれならまし

鉄瓶のふちに枕しねむたげに　徳利かたむくいざわれも寝む

妻が眼を盗みて飲める酒なれば　惶てて飲み噎せ鼻ゆこぼしつ

大正十三年の九州旅行で「とにかく思い残すことなく飲んで来た。揮毫しながら、大きな器を傾けつつ飲んだ。また、別に宴会なるものがあった。一日平均二升五合に見積もり、一人して約一石三斗を飲んできた、と数字に示されたときは、流石の私も、ものが言えなかった」とは以って瞑すべし、というべきか。

（松岡）

# 太陽の舟　目　次

三十二巻　十月号（通巻三一〇号）


わが愛する歌　―名歌鑑賞―　二反田　實

巻頭言……松岡　三夫……1

二十五首詠……湯本　いと……2

阿部正路論（第一〇八回）……須藤　宏明……4

歌誌散見（第八十四回）……豊泉　豪……5

作品Ⅰ……手塚ミッエ 他……6

八月批評（作品Ⅰ）……塩田　秋子……16

（作品Ⅱ）……緒方　善丸……17

合　評（座談会）……18

選者十首……角田　順子・土方　澄江……20

酒向　一次・渡辺　幸子……21

秀歌抜芳（三〇八号）……髙﨑　邦彦……22

作品Ⅱ……緒方　善丸 他……26

作歌の目・作歌の技法（第六十九回）……三木　勝……34

歌会・支部報告 他……35

編集後記　山名・山田（紀）・松岡

題字……阿部正路

表紙……イラスト阿部正冬

# いと路の店

湯本いと

豪雪の越後魚沼初雪のあした元気に産声上げり
生糸商営む父はわれの名を「いと」と名づけて大よろこびせり
一晩に一メートル以上積る雪たちまち陸の孤島となれり
果しなく越後平野の白き闇喘ぐ如くに夜汽車が走る
地吹雪の唸りの中は白き闇逃がる如く夜行車トンネルに
吹雪く夜は火燵で祖母の噺(おとぎ)きく語り上手にこぶしをにぎる
長い冬雪解け待ちて一せいに殊に鮮やかカタクリの花
越後路の春は短し雪解けのなだりを染めるかたくりの花
雪の下眠りを覚ますかたくりは殊に鮮やか北国の春
終戦で夫帰りしがほっとする間なく長病の入院となる

三人の子供残して夫逝けり神仏なきとつくづく思う
兄姉の助けを借りて五反田に飲食店〈いと路〉を開きぬ
手さぐりで始めし店の商売もおふくろの味がうけて繁盛
星影のワルツの如き〝カップル〟の別れの辛さ共に涙す
おふくろの味が受けてか若い人の憩いの場となり常になごやか
金のない夜学生には小声にて「出世払いよ」とふるまつてあげ
商売の上手とは言えず儲け下手　常連で楽しい毎日だった
密やかに心ときめく日もありて火ともし頃にのれんかかげる
常連の一人が後に有名な会社の副社長となりしもうれし
「あの店に行くと何やらほっとする」家庭の悩みなども打ちあけ
吾が店も時代の移り変りにてのれんをおろすことになりたり
二十余年苦楽を共にせし看板今朝は粗大ゴミとなりて運ばる
それぞれに定年となりＯＢ会に吾も招かれなつかしかりき
人生はそれぞれドラマとり返しのつかぬ事いと多かりき
五反田の夜の煌めきなつかしくかつての「いと路」の店跡にたつ

阿部正路論（第百八回）

# 阿部正路論

須藤宏明

## ―文学理論の根底としての作品―

阿部正路が二十九歳で上梓した『終焉の文学』（五月書房・昭和三十五年）は、その多くが、昭和三十年代、とりわけ、戦後という時代の中での、短歌のあり方を論じた文章である。ここには、その後の長い短歌人生を歩む阿部の短歌への沈思が凝縮されている。阿部は、若き二十九歳での思念を、ついぞ、ぶれることなく貫いているのである。終焉という言葉を題名に記した思惟、その感性は、太宰治の最初の小説集の題名が『晩年』であることに、極めて近似であると言える。阿部も、太宰も、その最初の出発点において、常に、終りという着地点を想定して物事を考えている。物事を、単発の瞬間的事象を対象にして考えるのではなく、長い射程を対象にして思考することの証しが、「終焉」であり「晩年」なのである。だからこそ、阿部は、絶えず「史」を学問の根底に置くのである。戦後という一時点での短歌現象を対象に思索するのではなく、伝統の中で短歌定型を再考する。この点が、浅薄な、短歌滅亡論、第二芸術の論と、一線を画す所以である。阿部も太宰も、伝統という重い軛に真摯に立ち向かったのである。特に阿部は、軛から安易に逃げようとはしなかった。短歌を愛する者として、正直に短歌に対面した。

その対面の日々の記録が、『終焉の文学』に収められた「×月×日」という型式をとる歌日記である。

×××月×××日

芸術とはもろもろの美しいものを創造することである。芸術を顕わして芸術家を匿すことが、芸術の目的なのである。

オスカー・ワイルドは、その著書『ドリアン・グレイの画像』の序文で、右のように述べている。

残念なことに、現代の歌壇では、作者の名を顕わして作品を匿すような行為が行われている。作品を切りはなした作家など存在するはずはないのに、作品と切りはなした作家論が横行している。（一一三頁）

この考え方、文学理論は、所謂テクスト論の根幹である。日本で流行するずっと以前に、阿部は、テクスト論という文学理論を体得していたのである。何より、作品を重視したこの考え方は、結社不要論、宗匠権力による結社の否定、同人誌的結社としての現在の太陽の舟短歌会の運営に繋がっている。ワイルドは、三島由紀夫も好む作家であるが、三島がワイルドから美の問題を抽出したのに対し、阿部は文学理論を見いだしている。阿部と三島の差異が、ここにも表れている。学者と作家の差異と言えるかもしれない。『終焉の文学』に収められている数々の文章は、阿部の文学の結晶がちりばめられている。

# 歌誌散見 第八十四回

豊泉　豪

## 「幻桃」①

「幻桃」は一九九八年四月に創刊された歌誌である。最初の一年間に四冊を発行したのち隔月刊となり、二〇一〇年七月号が通巻七二号となっている。創刊の前年、九七年に今西久穂が死去し、今西が発行していた「青幡」が休刊となった。その会員、ことに今西の出身地である岐阜のメンバーを中心に新誌創刊の要望が高まった結果、同地在住の松村あやを代表に、大阪の浦上規一を顧問として誕生したのが「幻桃」である。今西は五一年に近藤芳美の「未来」創刊に参加し、九二年に自ら創刊した「青幡」には、「アララギ」「未来」に所属した吉田漱と河村盛明を発行編集顧問に迎えている。これを継いで生まれた「幻桃」にも、吉田が発刊のことばと表紙絵を寄せている。なお、表紙絵はその後現在に至るまで、概ね二年毎に入れ替えながら、美術史家でもあった吉田の絵を使用している。「幻桃」創刊号の浦上の言を次にあげる。

「幻桃」は今西久穂の最後の歌集「幻桃月明集」に拠る。（略）久穂の歌は（略）子規、茂吉、文明の流れに立ち、そして芳美、隆、漱の影響をつよく受けてきた。／本短歌会は、久穂が（略）遺したあつい思いを引き継ごうという志が集って、その名称を「幻桃」とすることにした。

「幻桃」は歌誌の系統としては「アララギ」「未来」「青幡」に、歌人の系譜としては近藤、吉田、今西に連なるということになろうが、折々の特集で取りあげられる歌人や、松村が毎号表②（表紙裏）で紹介する作品などはバラエティに富んでおり、幅広い視野が確保されている。これまでに組まれた特集は宮柊二、佐藤佐太郎、齋藤史、土屋文明、齋藤茂吉、春日井建、大西民子、葛原妙子、上田三四二で、それぞれ評論と作品鑑賞、略年譜が掲載されている。

出詠者数は創刊号が一〇四人、七二号ではこれが一一九人となっている。結社を中心とする従来の歌壇においては、高齢化に伴い会員が減少するグループが多いが、その中で僅かなりとも出詠者を増やしているのは注目に値する。会員の在住地が岐阜、愛知を中心とした東海地方に多いことは変わらないが、関東地方の会員が相当数増加したようである。

選者制は設けておらず、出詠数は一人十首である。短歌作品と折々の特集のほかには、エッセイが数編と前号評、各地の歌会記録欄がある。歌会記録に掲載されている作品評が詳しく丹念で、紙幅も多く割かれているのが特徴である。

代表の松村、顧問の浦上は創刊から変わらず、現在の運営責任者は太田美千子、編集責任者は水鳥和美、以下十三名の編集運営委員が置かれている。結社のホームページが設けられているのは今日珍しいことではなかろうが、そこに会の成り立ちやこれまでの歩み、役員体制などが詳しく記されていることに、この会の運営姿勢が表れていると感じた。

# 八月批評（作品Ⅰ）

塩田　秋子

**・希望一つづつ手放してゆく日々の野辺にかたらふ荒地野菊は**

**玉川　愛子**

小さなものへのいとおしみは希望に通じます。小さくも希望ひとつあれば人生は生きてゆける。素晴らしい生きざまが七首の中に脈々と流れ、静かな感動を呼ぶ。

**・水を張る広き田圃に映る山わずかな風に田の面波うつ**

**深谷　充代**

水張田の美しさ。上句は静で、下句にわずかな動。その波動がリズムとなり、残像となり鑑賞する者に美しさを与える。表記―わずか（新かな）、（わづか（旧かな）

**・見渡すと瓦の波に覆われた妙義を望む藤岡の街**

**丸山孝一郎**

電車でワンコイン一日の旅。何とも羨ましい。卓越した想像力。その下地に在るのは場所々々の歴史と自然への愛、自由を満喫した一日だったことでしょう。

**・種蒔けばベランダに置きしプランターも吾れのなしゐる緑の大地**

**三木　勝**

プランターはご自分の世界。しかしそれが天を目指していると言う不思議な魅力をもつ歌の中の一首。

**・神の世の船材杉は浮宝父の手入れし杉山は美し**

**村田　孝子**

神代には特別な杉で船を造ったと聞くが、それを歌材にして父上の杉山を讃えていらっしゃる。伝統の重みと更に父への懐かしさもよく表現されている。

**・ビル風に耐へて鴇色競ふがに今を盛りの路地咲きつつじ**

**山本　賀子**

ビルの合間の路地につつじが咲いた、それが鴇色に。生活の中のこの一行を美しく短歌に表現された。ピンクではなく「ときいろ」だ。生活のうたがとても大切だと思う。

**・毎日の普通の家事がいとおしくひとつひとつを丁寧にする**

**宮原喜美子**

毎日の家事がいとおしいと言われる。ひとつひとつが大切と。力士のよく言うひとつひとつなる言葉、これは宝です。普通がいちばんむずかしい。

**・病み有りて初めて気付く我が生の鼓動は天地に従することを**

**よしだ　ゆきお**

自分ではどうすることも出来ないものに病気のときこそ気付くと。とても大切な、従って美しい歌です。

**・久方の光かげりて詠む短歌溺れてつかむ藁にしあらむ**

**生稲　進**

歌人の心が流麗に詠まれています。この様に表現したいものと日頃おもっていますが、それができず、近頃は居直り気味、自然に自然にと自身に声かけをしてます。

# 八月批評（作品Ⅱ）

緒方　善丸

**・明日葉が効くと伝え聞き播きし種今盛りなり夫逝きし夏**
**今井　芳枝**

種から育てた明日葉は病人には間に合わなかったのだろうか。夫が亡くなった今、勢いが出てきた明日葉に募る寂しさ、無念さが感じられる。

**・この齢いつお迎えが来てもよい言いつつ飲むは高価なサプリ**
**岡部千代松**

「お迎え」をどれくらい感じているかは別にして、日常の食事で栄養が摂れない環境なら寂しい話。サプリの利用は、現代の食事情の悲しい現実である。

**・旅足橋のしろがね眩し谷を走る青嵐に髪あそばせて立つ**
**木村恵美子**

新緑の季節の一コマを切り取った清々しい風景が見えるようだ。「髪あそばせ」で、渓谷を吹く涼風に浸りきっている作者の思いが感じられる。

**・ブランドの財布を持ちて夜九時のマクドナルドにゐる高校生**
**熊谷　香織**

若者の世相を表しているが、この高校生がマックで何をしているのか、なぜ九時になったのか、これからどうするのかなどの情景描写があると説得力のある歌になると思う。

**・稲田なる無人の駅ゆ筑波嶺をはるかに望み時の動かず**
**佐伯　朋子**

駅は人々が去来して世相を写す鏡のようなもの。稲田から続く筑波山の風景は不変で、昭和から今にいたるまで多くの人生を眺めてきた「寺内駅」を優しく見守っているようだ。

**・父は待つ。自分で治すプログラムよく見て帰れと地球の科学者**
**酒向　一次**

親が子を見守るようにはやぶさを扱ってきた科学者の思い入れを歌ったが、この歌単独では意味が伝わらない。小惑星探査という地味な分野ながら、機械を我が子のように扱ってはやぶさの帰還を成し遂げたことは日本の誇りだ。

**・あまたなる石仏佇てりあまたなる人の祈りと願ひを負ひて**
**末次　房江**

仏様は一人の人の深い、切ない、崇高な祈りを背負っています。石仏群はそれらの人の思いと仏の救いが凝縮した濃密なエネルギースポットであり、緊張感がよく表現されている。

**・カルテ観て患者を見ない医の前で自問自答し言葉を失せり**
**鈴木　熹子**

作者は今まで医者にかかられたことがなかったのか、病気は診ても人を観ない医療は残念ながら公然の事実なのだ。今度は、自問自答でなく、提案、主張をされたらいいと思う。

**・肩車にケケケと笑ふ声こぼし一日のストレス消しゆく親子**
**杉山　栄子**

子どもの元気を親がもらってストレスが消えれば、一家団らんして健康的な家庭が築けるというものだ。「ケケケ」の音が効果的。

# 合評

## 座談会

**司会**　では、合評を始めます。今月は八月号掲載の中から四首選んで行います。まず最初は、水戸支部の**諸　幸子**会員の

**われのみのなすべき事の無為に過ぐこころたひらかに納めてゆかな**　です。如何でしょうか。

**Y**　この歌の場合、無為というのは仏教語の無為ではなくて多分、何もしていないでブラブラしている状態を言っているのだろうと思います。無為に過ごした苛立つ心を平かに納めて行こう、という人生の達人にしか詠めない歌ではないかしら、と思い羨ましい歌だと思いました。

**I**　作者が大般若会に参加した感想の歌のようですね。

**S**　私は初句の「われのみのなすべき事」は「われのなすべき事のみ」だと思いますけど。

**T**　それでは強すぎるのでは。しかし、「われのみのなすべき事」はあまりにも概念的で抽象的なので、読者には「なすべき事」が何なのかがわからない。

**Y**　「自分に課したするべきことをせずに過したけれども」と作者は云っているのではないのかしら。

**T**　宗教とも絡んで来るのでしょうが、無為に過ごしている日常を後悔している様子を具体的に見せると良いけど、下句を詠むと無為に過ぎる事を肯定しているようにも取れます。解り難い歌です。直すとすると、「事の」と「に過ぐ」を取り、「なすべき何何の無為」として、何何の所に、五文字で作者の日常の具体的な動作を表現すると良いと思う。句またがりで七、五にする。そこに、「無為」の正体みたいなものを入れたい。

**S**　結句の「な」は願望でしょうか。

**T**　そうです。奈良時代によく使われた願望の助詞です。

**司会**　それでは、二首目は月の舟支部の**相羽照代**会員の

**殺処分感づきゐるや嘯(うそぶ)ける牛の目(ま)の子(こ)の涙あつし**

です。何方からでもどうぞ。

**Y**　私は、「目の子」というのが「まなこ」の元の言葉というのを初めて知りましたし、八月号で口蹄疫のことを詠んでおられるのはこの作者だけですね。

**S**　私もそうですが、辞書を引きますと、「嘯ける」は獣の鳴き声とか吠えるとありましたね。

**I**　そうですね。獣の鳴き声というふうに出ているので、牛にはあまり使わないでしょう。

**T**　牛は獣ではなくて家畜だから、この字を使うのには違和感があるね。でも、作者はこの言葉を使いたいのだと思います。

**I**　そうなんです。だから「嘯く」は現代では意味が大分変化してきています。

**T**　上句の「嘯ける」と下句の「涙のあつし」とは合わないような感じがします。

**Y**　「嘯ける」の代わりになる言葉としたら何が良いでしょうか。

**T**　「しばたたく」という語句があるけど、これを使うと下句へすんなり続きますね。「涙のあつし」で作者の優しい気持も伝わります。又、「嘯ける」をそのまま生かすなら結句

を替えたい。例えば、「牛の目の子の光鋭し」ぐらいに直したいです。

**S**　初句に「殺処分」という強い言葉がありますから、下句もそれに合ってきますね。

**司会**　三首目は岐阜支部の**木村百合子**会員の

**高原の木は百年で枯るるとふ白骨のごとき木々点在す**

です。如何でしょうか。

**S**　本当に高原の木は百年で枯れるのでしょうか。

**T**　作者は何処か旅行に行って、そのように説明を受けたのでしょう。

**I**　「高原の木は」と条件をつけて、「百年で枯れる」と言い切って、それで良いのかな、と思いました。

**Y**　広い高原の中には、百年以上も経っている木も、盛りの木も若い木も見える。作者は自分の存在を忘れて時の流れを感じているのかな、というふうに私は読みました。

**I**　木は短命ではなくて長命な筈なのに、それが白骨になっている、というのを見て作者は驚いているような様子ではなくて、むしろ淡々と読んでいる感じを受けます。

**司会**　直すとしたら、どこでしょうか。

**T**　初句に「何何は」というのを持ってくるのは避けたい。

**S**　「木々の点在」も気になりますね。

**T**　そうです。「木々」と「点在す」はだぶっている感じがします。例えば、「百年で高原の木は枯るるとふ白骨のごと空に鋭し」としてみます。なんとなく中也の詩の世界を思わせるようです。

**Y**　風景がよく見えてきますね。

**司会**　四首目は、伊豆支部の**佐田孝義**会員の

**室生寺の丹塗りの塔の小さくて慎ましく見ゆ女人に似合はし**

です。Ｉさんからどうぞ。

**I**　塔が小さくて慎ましく見えるから、女人に相応しいと詠んでいるので、常識的な感じの歌に思えます。

**S**　女人高野の塔のことですね。

**Y**　五重塔ですが小さいのですか。

**T**　小さくとも五重塔です。法隆寺の塔と比べると随分小さいですね。

**S**　奈良時代の塔でしょうか。

**Y**　平安時代だと思います。台風の被害の修復のため部材を調べたら七九四年頃の伐採だったそうです。

**T**　欠点の無い歌だと思うけど、「見ゆ」のままだと女性は全部、小さくて慎ましい、というふうにとれますね。

**司会**　なるほど、そうですね。

**T**　「見ゆ」を「見ゆる」になおしてみると、室生寺の塔は慎ましく見える女人に似合う、という意味になってきます。作者の意図とは違ってくるかもしれませんが、歌としては面白いと思う。

**I**　図々しい女人には似合わない、ということですね。

**Y**　結句の「似合はす」はとても良いと思いましたね。

**司会**　本日はこれで終ります。今月も佳い歌をとりあげ、それぞれ適切な評をいただきました。ありがとうございました。

（記録　山田紀子）

選者　角田　順子

再びは戻らぬ人生夫と吾のひと日ひと日が重さ増しゆく
中村　陽子

清清と双葉の陰に鈴の花白きベールの修道女に似て
手塚ミツエ

興福寺東大寺から春日大社（かすが）まで歩き歩きて　茶粥の旨し
富原　澄枝

海の見える人気の丘はこの辺り別荘増えゆき不景気は何処
辻本わか子

動く禅心・息・動と整へてゆったりと舞ふ若葉の下で
原武　寿子

鹿の角ポツンと一本裏山に残りの片方何処にありや
土方　澄江

風切りて自転車を漕ぐ息（こ）の家に私自慢の葱携へて
福地　啓子

毛筆で「先立つ不幸」と認めて知覧を飛びし従兄弟帰らず
宮島マツヱ

今が一番と云いきる友の潔さ親抱えつつそつなくこなす
角本　静江

片耳の聴力薄れしわれなれば妻密かごとメモにて話す
土橋　茂徳

選者　土方　澄江

今し炉に入りゆく母の柩より幽かな軋み引き戻したき
冨永　道子

退院の喜びの声受話器より歌友（とも）よ健かれ若葉のごとく
長須　正文

指先も足の運びもゆるやかに導きくれしわれの先輩
原武　寿子

水を張る広き田圃に映る山わずかな風に田の面波うつ
深谷　充代

毎日の普通の家事がいとおしくひとつひとつを丁寧にする
宮原喜美子

雑草を刈り取る嫁に感謝しつつ雑草の花見たき吾あり
村田　一江

事成りてこれからの余生思うとき些細な夢にも熱き情あれと
よしだ　ゆきお

クールビズ買いたてのシャツ封開ける主人の笑顔さわやかに映え
尾上　貴子

父は待つ。自分で治すプログラムよく見て帰れと地球の科学者
酒向　一次

肩車にケケケと笑ふ声こぼし一日（ひとひ）のストレス消しゆく親子
杉山　榮子

選者　酒向　一次

陽が落ちて肌寒くなる公園で一人ベンチにただ座りおり
豊島　英明

青梅のポトリ落ちにし春宵の三日月うすれ風立ちており
永野　昌子

お茶畑程よい高さに整いで摘み取る手先軽やかなりぬ
土方　澄江

自家みそを作り寝かせし空小屋の四隅にかすか酵母の匂ひ
村田　孝子

働いて納めし浄財医療費につぎ込まれゆく病める国かも
森本　元昭

こみあぐるものの溢るる日もありて背より冷たきもの走りゆく
井上萬里子

齢かさねなほ髪の毛伸びて刈りにゆく生きている証少なけれども
遠藤　剛

映り行く人間模様淡々と受けとめられる強さが欲しい
尾上　貴子

ブランドの財布を持ちて夜九時のマクドナルドにゐる高校生
熊谷　香織

次々に空占めて建つ摩天楼目裏に顕つは戦禍の記憶
川村　貴美

選者　渡辺　幸子

師も歌友もその生短歌（うた）の中にあり三百冊の歌誌潤みゆく
土屋　道子

杖をつき犬引き家路辿りたる義父の自然（じねん）に生きる安けさ
高﨑　邦彦

連翹の肩に触れくる曲がり角縋るもの欲し細き道ゆく
塚本　正子

すっきりとつるなしインゲン茎伸ばし光り降る天双葉（あま）の目指す
三木　勝

想ひ出は清らにめぐる我がなづき美（は）しきものは忘れまいぞと
宮井　富美

みそ豆を炊きし石組みかまど跡よもぎやわらに焚き口埋むく
村田　孝子

思ふようにいかない日々の多かりし受け身となりて黙し頷
伊藤　モト

明日葉が効くと伝え聞き播きし種今盛りなり夫逝きし夏
今井　芳枝

ひとつ荷を降ろさば次の難題の生（いのち）の流れからまりてくる
川村　貴美

本を読む物書くテレビに知識得る切実に知る眼の有難さ
志賀　倭子

# 髙　﨑　邦　彦

**師も歌友もその短歌の中にあり三百冊の歌誌潤みゆく**
**良き歌と良き師良き友に巡り合ひし「太陽の舟」吾が宝物**

土屋　道子

私とほぼ同時期に「太陽の舟」に参加し、いつの間にか二人は最古参になっていた。巻頭二十五首詠は、その三十周年を記念した、ある意味において作者の歌人としての総決算とも言える。作者も私も結社や歌誌は「太陽の舟」しか知らぬ。師は阿部正路先生唯一人。他誌にも他師にも一切目を向けず、阿部先生が標榜した『同人誌的結社誌、「太陽の舟」を中心として集まった、自己に自由、他人の尊重』の仲間であり、最も忠実に、そして最も長く「太陽の舟」を支えて来た。その三十年の歴史が二十五首詠の中に脈々と輝いて私の涙を誘う。沢山の歌友と別れて来た。「太陽の舟」は生き別れは少ない。ほとんどが死に別れ。阿部先生は沢山の結社の離合集散を見、その哀しみと憎悪を嫌った。私も作者もその先生のお心を間近で見、肌で感じて来た同志だった。私と作者の類似点は沢山有る。その最たる物は、常に正面に立つ事を嫌いながら、いつの間にか、正面に立たされていた事への戸惑いであったろう。抜芳歌は最初と最後の二首をしか記載しなかったが、気持ちは全てを記載したかった。「進み来し道に間違い無かりけり八十路に入りしわが来し方の」正しく作者の真実の思いである事を私の心は素直に受け止める。これを秀歌抜芳と呼んで良いのか分からない。しかし「太陽の舟」三十周年の記念にこの巻頭二十五首を発表された事に衷心より感謝したいのだ。阿部先生の学統を継ぐ諸氏はどうか、知らない。しかし作者程沢山の阿部先生の著書を読んでいる人を私は知らない。これからも阿部先生の御心を守って「太陽の舟」の為に一日でも長く生き続けてほしい。

**初めてで最後とならむ此の旅のカメラに写さる五稜郭跡**

塚本　正子

私は函館の五稜郭には二度行った。旅の面白さは何度行っても常に感動が新鮮である事だ。人はその時その時の心の有り様が決して同じでは無い。だからこそどこに在っても人生は一期一会なのだとも言える。作者は五稜郭をカメラに納めながら、その思いを深くしている。ある年齢になると、一入その思いが深いのかもしれない。カメラの目は作者の目でもあろう。

**何台も石運ぶ車通り行く山を崩して家の建つらし**

辻本わか子

「海の見える人気の丘はこの辺り別荘増えゆき不景気は何処」があるので海の見える美しい別荘地造営の為、車が石を運ぶ様子を詠んだ。山を崩し石垣を積んだり、土止めの為に石は必要。作者

# 前々号（308号）秀歌抜芳

はその状況を決して快くは思っていまい。山を崩しての宅地造成は一種の自然破壊。別荘地と言うのが合法であるがゆえに、もどかしい。

**石斛に予後を励ます風嬉し梅の古木に群なし咲けり**

手塚ミツエ

「石斛（せっこく）」はラン科の常緑多年草で、暖地の岩または古木に着生する。作者は病後の体を労りながら、初夏の風に吹かれていた。その石斛を通って吹いて来る風は作者の予後を励ましてくれる様に作者には感じられた。梅の古木に沢山着生しているその生命力。そして梅の古木の持つ大らかで豊かな命。その組み合わせの見事さに作者も又生きる力を感じ取った。人が自然から受け取る物。それは人の感性だと知る。

**又来ると告げて撫でたる母のほほのぬくもり決して忘るるはなし**

冨永　道子

その母は薩摩半島枕崎に生まれ種子島に嫁いで作者を生んだ。九十歳を一期とし、七人の子に送られたと言う。見事な一期と言えよう。死ぬ五日前母を見舞った時の行為は作者生涯の大切な宝物となった。古里を遠く離れて生きざるを得ぬ人にとって母は古里そのもの。作者のその喪失感の深さを思う。今年の全国大会の第一位は作者の母を詠んだ歌であった。

**一本の墓標を立てた　つまづいて傾いている過去の消しゴム**

原田　寛

作者は今年三月三十一日をもって退職した。ある意味、それは一本の墓標。もはや過去であり、現在でも未来でも無い。作者の心の中には過去を過去として認識する沢山の墓標があるのではとも推測させる。人間は決して過去を消せない消しゴムしか持っていない。だからこそ人は誰でも消したい過去を持ち続けざるを得ない。消したい過去程消せないから人生は切ない。

**毎日の普通の家事がいとおしくひとつひとつを丁寧にする**

宮原喜美子

毎日の繰り返しが生きる事のある意味悲しくある意味豊かな人生の在り様であるならば、毎日の繰り返しを否定する事は悲しい。抜芳歌は、そんな毎日の繰り返しの主婦としての原点を普通の家事と位置付け、自らが平凡に生きている事を大切にし、いとおしむと言う。非日常に憧れた青春を十分に生きたからこそ、これ程の含蓄のある言葉が生まれる。今こうして生きた作者は老年に入ってどんな人生を詠むであろうか。

**雑草を刈り取る嫁に感謝しつつ雑草の花見たき吾あり**

村田　一江

「雑草」とは自然に生える色々な草。それぞれに名はあるが、人にとって目的外である為に大切にされない。私は鴨川の山里に住んで今この雑草の

# 髙　﨑　邦　彦

凄まじい生命力に圧倒されている。抜芳歌、作者独特の諧謔。しかしこの中に歌人の美意識、物事の真実を見る目の確かさを私は感ずる。自己の生活感情とは別の次元で自己主張の強烈さが小気味良い。

**小さき頃子葉育てし桜木の父名付けくるる「ようこの桜」**　八代　陽子

「子葉」とは種子から発芽した幼植物に最初に出る葉（広辞苑）、作者がまだ小さい頃父が種から桜の木を育て、その桜の木を「ようこの桜」と命名したと言う。何と言う豊かな生か。その木は今はもう五十余年を過ぎ大木に育ち、作者の生家で美しい花を咲かせている。父の愛情が桜の木と共にすくすくと作者の心の中に大きく育って行く。今親となり、娘さんに対する作者の愛情の深さが分かった気がする。

**人柄も姿も笑みも白百合の似つかわしければ手向け参らむ**　渡辺　幸子

千葉支部の中心的同人であった加藤さんの死は、私達千葉支部の会員に大きな衝撃を与えた。そして女子会員の方々は挙って加藤さんの眠る笠森霊園にお参りに行った。その折の歌。抜芳歌、私も加藤さんを思う時、真実大輪の白百合が似つかわしいと思う。その心は少女の様に純粋で、亡夫への想いは深く激しかった。私は今でもこの世に戻って来てほしいと真実願う。

**高齢者多くの患者いたわられ名前呼ばれてうれしげに行く**　岡崎　くに

そこは鳥山診療所。決して大病院ではあるまい。私が行っている病院は鴨川市の大病院。多くの高齢者の方も来ているが、抜芳歌の様な風景は見たことがない。医療とは本来抜芳歌の様な物ではなかったか。「医は仁術なり」その本質を忘れた現代医療は延命は出来ても、豊かな生を与えられないのではと思う事がある。素晴しい医師に恵まれた作者の喜びを共有したい。

**天候の悪しき日によく演説をする議員あり駅前広場**　熊谷　香織

「人間」と題する七首、見事な人間ウォッチングだと感心させられる。その観察眼は、就学前の子供から老人にまで及ぶ。「父親の傘にあぶれし少年は無言で肩を濡らしてをりぬ」は現代社会の親子関係の病巣を見事に抉り取り、抜芳歌は抜け目無くこずるい議員心理を見事に垣間見せた。その外、障害者を食い物にする新興宗教など、益々作者の眼力は冴えて来た。

**母の心、祖母の想ひをこの花に問はまし血縁といふは愛しも**　小林　絢子

「この花」とは母も祖母も愛した庚申塚の桜。その庚申塚に咲く桜は、祖母も母もそして作者も母娘三代に渡って愛でて来た桜。祖母は逝き、母

# 前々号（308号）秀歌抜芳

も又今年の桜を待たずに逝ったと言う。作者は今花の時を迎えこの桜の花を眺めながら、桜に託した二人の想いを桜に問おうとしている。そして真実血縁と言うものの不思議を実感しながらその温もりの中に居る。

**贈られしカーネーションを土に下ろし水遣れば葉のさやぐ気がする**　　塩田　秋子

母の日の贈り物としてもらったカーネーション。おそらく、切り花では無くて鉢植えであったろう。だから「土に下ろし」が生きる。私にはこの言葉の響きが何とも言えず美しく生活に根付いたものに感じられ新鮮であった。そして水遣りをするとカーネーションがさやぐと言う。そのさやぎはきっと贈り主と作者との豊かな心の交流であったに違いない。

**彳亍（てきちょく）と八十路の歩み階段は手摺頼りて眼科へ通ふ**　　志賀　倭子

「彳亍（てきちょく）」「彳（てき）」は左歩、「亍（ちょく）」は右歩、意味はたたずむ事。また少し行く事（広辞苑）不勉強の私には、初めて目にし、耳にする言葉だった。八十を過ぎ、眼を患う作者にとって、その歩みは二重のハンディーであったろう。その恐怖はいかばかりであったか。それを何と見事な言葉で表現し得たものであるか。語彙が豊かであると言う事がこれ程短歌表現にとって大切であると改めて教えられた一首であった。

**抱え事全て忘れた十日間入院生活悪くも無くて**　　杉本　和子

「はじめての入院」と題する七首の掉尾の一首。全体を通じてまるで入院生活を楽しんでいるかの如く感じられるのは、病気そのものがそれ程深刻な物では無かった為であろう。それにしてもまるで童女の様な素直な感性には驚かされた。抜芳歌はそんな中で唯一主婦として、一家の中心的存在としての作者の顔が見えた一首だった。退院すると又明日から主婦の忙しい生活が待っている。入院も悪くはないね。

**窓ごしに片割月のさし込みて夜明け間近を知らしめて居り**　　菅谷　孝子

半月、弦月、弓張月、これ等も十分に美しいのだが、片割月も又美しい言葉だ。古来日本人は月に沢山の思いを托して来た。拾遺和歌集(恋)に「あふことは片割月の雲がくれおぼろけにやは人の恋しき」がある。この歌は片割月だからこそ成立する。作者は西の空から窓越しに差し込む半月の光りを見てもう夜明けが近いことを知る。半月は十分に明るい。昔の人々はそうして一日の準備を始めたに違いない。そんな素朴な思いを抱かせる秀歌である。

# 作歌の目・作歌の技法（第六十九回）

## 作歌の技法（連歌編3）

三木　勝

連歌は、集団の中で個を活かすことを学び楽しむゲームである。近代日本社会の中で家族は崩壊し、地域の連携は崩壊した。幼児虐待や育児放棄、老人の虐待や高齢者の生存確認の不確かさ。学校でのいじめ、職場・地域でのいじめ。大人社会でのいじめ社会。老人の万引きの増加。派遣社員に見られる国民の貧困化・スラム化。豊かな日本社会は、終戦・戦後、そして高度経済成長を得て、達成されるはずではなかったのか。今日、富の分配の適切な装置を社会的に喪失した日本は、若者と老人の貧困を加速させている。

経世済民と富の分配の理念なくしては、政治も経済も国民一人ひとりのために動くことはない。日本社会では、この政治・経済の理念を支えている底の底の基盤には、永年培ってきた《人と人のつなり》という理念があった。「一寸の虫にも五分の魂」、「泥棒にも三分の理」。新自由主義・市場原理主義の経済は「五分の魂」・「三分の理」に耳を傾ける事なく日本の経済・政治を席捲した。無差別殺人の秋葉原事件は貧困には耳を傾けない社会の、その結果としての象徴的な事件であった。それ故に私たちは全体性を喪失し、バラバラになった個を共同体の中の個として安心立命できる回路を社会的にもう一度、手に入れなくてはならない。

文芸は、政治・経済に対して無力であるが、文芸の持つ、共同性への力は、侮ることはできない。日本における文芸〔長歌・短歌・連歌・俳句〕は、《人は一人では、生きていない》ことを、その創作活動を通して作者に認識させる機能を持っている。特に連歌は、集団の中に個を埋没させることによって、個を活かす方法・視点を参画者に教えていく力を持っている。この点において連歌の復興運動を起こす意義は今日十分にあるといえるであろう。

連歌には、短連歌と鎖連歌がある。短連歌は五七五の前句とそれに応える七七の句の二句からなる。次はその一例である。

寒風を裂きて飛び立つ鵯（ひよ）の声　　房江
吾（あ）れも生きなむ声果つるまで　　礁湖

二人でひとつの世界を作るのである。前の句の作者は、世界の展開を後の読み手にゆだねる。後の句の読み手は、世界の始まりを前の句の作者に委ねるのである。この共同性を通して、個が活かされる。この共同性なくして、個が活かされる空間が、発生しないのが、連歌の世界である。

衣のたてはほころびにけり　　義家
年をへし糸のみだれのくるしさに　　貞任

この短連歌は説話集『古今著聞集』に記されている。この短連歌の応酬によって敵味方である義家と貞任は棄戦した。敵味方という職業軍人の役割を放棄し、一個の人間同士として心の交流をし、生きる者としての悲哀を分かち合った。感情の交流によって人間性を取り戻した一瞬であった。

# 歌会報告

**本部歌会**　8月例会（第365回）（末次記）
日　時　8月14日（土）　13時～16時30分
場　所　きゅりあん（品川区立総合区民会館）
出　席　22名　出詠　25首
司　会　生稲　進同人

酷暑にもめげず二十人以上の出席者があり、熱意にみちた歌会でした。久しぶりの川村さまのご出席に皆喜びあいました。

事務局より来年度の大磯全国大会の案が提出されました。歌会は、まず代表より阿部先生の歌について解説して頂きました。

・長城に塗りこめられし一死體髪青く赤き目をせし女
「天山離々」よりの万里の長城の歌で「人間が人間を敵とすることのむなしさ」を詠って悲痛であると・・・・

今月の高得点歌

・漬物石いつよりか不要捨て兼ねつ嫁入りの荷に妣乗せくれし　川村　貴美
・何もなく過ぎゆく日々の幸せをかみしめてをり皿洗い終へ　角田　順子
・ピカドンを浴び運ばるる一刹那きみは笑顔を見せたりと聞く　松本　啓子

（山本記）

**渋谷支部**　支部長／志賀　倭子
日　時　8月14日（土）　10時～12時
場　所　きゅりあん（品川区立総合区民会館）
出　席　7名　出詠　7首
司　会　山本　賀子

外は猛暑のさ中、涼しい室内で熱心な支部歌会が催され、敗戦の夏を思うと幸せを感じます。

・海底の音なく冷たい駅出るや竜飛岬の風車がうなる　丸山孝一郎

青森海底駅の風車（風力発電）の景がよく解りました。

・学習を忘れし脳と歎きつつ焦がせし鍋を磨きゐる夜　志賀　倭子

「学習」は学問と捉え易いので「失敗を生かせぬこと」等と直す方がよいという意見が出ました。

「消失点」（遠近法で結んだ線の先の点）「黄泉平坂（よもつひらさか）」（古事記の神話にもある黄泉と現世の間の坂）聞き慣れない言葉なので、生稲さん、武田さんが説明なさいました。

八月号七首詠は、佐伯さん、山本さんの歌を鑑賞。

（松本記）

**品川支部**　支部長／久保田昭江
日　時　8月19日（木）　13時～16時
場　所　旗の台シルバーセンター
出　席　5名　出詠　9首
司　会　松本　啓子

・今年初みんみん蝉の声を聴く猛暑続きの八月一日（いっぴ）

異常な暑さの続く中、五人が集まり互いの無事を確かめ合いました。丁度右の一首披講に合わせて、センターに庭でみんみん蝉が鳴きはじめ、安らぎの気分を味わいました。

・息子より「安否確認」のメール来る「元気ですよ」とメー

ルを返す　吉岡悠紀子

熱中症を案ずるも流石、吉岡さん親子、メールの四文字五文字で事足りるのが現代的と一同感服しました。（角田記）

**柏支部**　支部長／末次　房江

日　時　8月20日（金）12時30分～15時
場　所　アミューゼ柏（D）
出　席　8名　出詠　19首
司　会　角田　順子

連日の猛暑もいくらか和らぎ新メンバーの熊谷啓子さんと麦島和子さんも出席されました。和気藹々の中で問題提起し合い、互評しました。

・奥尻の賽の河原に立つ地蔵岬の石積み霊をなぐさむ　塚本　正子

（渡辺記）

**千葉支部**　支部長／照山　好子

日　時　8月21日（土）13時30分～16時
場　所　穴川コミュニティセンター
出　席　12名　出詠　13首
司　会　森　五貴雄

コミュニティセンターの玄関に「太陽の舟」会員募集のポスターを、木村さんが印刷してくださり掲示しました。動向の士が目に留めて歌会を訪ねてくれることを期待します。また11月に開催のコミュニティ祭りに、短冊に会員作の短歌を書きパネル展示をして参加することになりました。

歌会は高﨑先生お休み、松岡先生、原田先生に講評していただきました。高得点歌です。

・息子ら帰りソファーの下の忘れ物ミニカーひとつ今日は送り火　富原　澄枝

・雲切れて姿現わす月山の手のひらほどの残雪眩し　上田やい子

**渋谷支部**　支部長／志賀　倭子（生稲記）

日　時　9月11日　10時～12時
場　所　きゅりあん（品川区立総合区民会館）
出　席　6名　出詠　6名
司　会　生稲　進

猛暑の中休みの一日、宮原喜美子さん（月の舟支部）が飛び入りで参加してくださいました。

・嫁ぎ行きし娘をいとしいと今更に思いて手に取る電話機の重し　宮原喜美子

微妙な気持ちが上手く表現されていますが、調べがいま一歩。皆で推敲し、このように変更しました。

・嫁ぎ行きし娘のいとし今更に思えど手に取る電話の重し

9月号に掲載された山本さん、宮原さんの7首をそれぞれ鑑賞をしました。

**掲示板**

日本歌人クラブ「風」（二〇一〇No一六八）、で川村貴美同人が上川原紀人の特選に入りました。大慶です。

・水底に在る錯覚か庭樹木の緑（あを）に染みつつ魚となる午後

**お詫びと訂正**　九月号

三十頁下段　一行目　酒向一継→酒向一次